Eugene O'Neill の *Strange Interlude* について

木　村　俊　夫

I

「あゝ，あたしは地上で一番得意な女であるはずだわ……この世で一番幸福な女であるはずだわ！」(616)[1]

オニールの『奇妙な幕合狂言』の6幕の終りに，女1人，男3人は奇妙なタブローを形成するが，上の引用は，この本篇のクライマクスともいい得る場で，女主人公ニーナ（Nina）の叫ぶ言葉である。本稿は，ここでいわれた「幸福」をめぐっての論考である。

この長篇戯曲の中で「幸福〈な〉」(happiness, happy) なる語の使われる回数はおびただしいものがある。happy だけで110回，happiness が65回用いられる。更にこれに関連する happier, happiest, happily, unhappiness などを加えれば，細部の正確な数字はコンコーダンス[2]にゆずるとして，200回近い頻度となる。勿論，happy, happiness の如く日常多用される語が，戯曲の中においても，ある程度多く用いられるのは当然であろうが，上にあげた数字は異常である。リアリスチクにとれば滑稽にさえひびく。しかし，リアリズムをこえて「思想傍白」(thought aside) という技法をこの作品に採用したオニールは，このいわば表現上のデフォルメを意図的に行ったにちがいない。

古来，幸福論の歴史は長く，そして豊富である。幸福を主題にした文学作品の数も多い。メーテルリンクの『青い鳥』(Maurice Maeterlinck, *L'Oiseau Bleu*) の存在は，オニールも知っていたであろう。またオニールとの思想的関連で重要と思われるショペンハウェル[3]（Arthur Schopenhauer）も幸福について多く論じている。またオニールのこの作品よりすこし後には，この『幕合狂言』の副題としてもふさわしいような表題を持つ精神衛生の書物[4]も出版されている。ただし，本稿はこれらの著作と『幕合狂言』との関係を論じようとするのではなく，むしろ作品そのものに即し，「幸福」を軸にして，この作品がどう展開するか，をみておきたいのである。焦点をニーナにあてる。他の登場人物全ても，しばしば「幸福」を口にするが，彼らから聞えてくる「幸福」は女主人公ニーナの叫ぶ「幸福」のこだま，乃至は波紋であると思われる。

オニールは，（オニールも，というべきか）自分の用語の，皮肉な多義性を好み，あいまいさを利用する人である。彼の場合，しばしば言葉は単層的に明らかな意味を持つよりは，意味が重層化する。言葉も，いわば仮面をつけるのである。この作品の表題にしてからが，その訳語は「奇妙な幕合狂言」とするのに定着しているが，これは物語りの内容の皮肉な意味を暗示してもおり，また自らをおとしめて，作品を単に「風変りな茶番劇」とみたてているふしもあ

1. テキストは *Nine Plays by Eugene O'Neill* (New York: The Modern Licrary, 1932) を用いる。カッコ内の数字は引照頁数を示す。以下同じ。
2. J.Russell Reaver, ed., *An O'Neill Concordance*, 3 vols. (Detroit: Gale Research Press, 1969).
3. この「幕合狂言」とショペンハウエルとの関連を探る論文には，Doris Alexander, "*Strange Interlude* and Schopenhauer", *American Literature* 25 (1953); William R. Brashear, *The Gorgon's Head* (Athens: The University of Georgia Press, 1977): Chapter VII. などがある。
4. W. Beran Wolfe, *How to be Happy though Human* 1932; Reprint ed., Harmondsworth: Penguin Books, 1957).

る。ともあれここでの 'strange' は単に「奇妙」であるのではない。これはまた「疎外」(estrangement, alienation) の意識を強くはらんでいる。'interlude' の方は，技法的にみて，対話の中にはさまれた「思想傍白」をさす，とみることも可能であるが，また，ニーナが「人生」(life) と「うそ」(lie) とを重ね合せる (624) のを聞くときと同じく，「あたしたちの生涯は，父なる神の電気仕かけの芝居の中の奇妙な幕合狂言」(681) という言葉を聞くとき，何か実体を欠いた空しさをこの言葉は伝えてくる。[5] これはまた転用されて，まどろんだような，活気のないニューイングランドの町の姿を語るのに使われる (487) こともある。「唯一の生命のこもった生は，ただ過去と未来にあるだけ，現在はひとつの幕合狂言」(646) といわれるときにも，われわれは同じ空しさを感じる。しかしこの言葉に続けて，「われわれが生きていることを証明させるために，われわれが，過去と未来に呼びかける奇妙な幕合狂言」といわれるとき，われわれは想起する。この空しい幕合狂言こそが実ははげしい生の場である，ということを。それだからこそ，「生きる」ことに疲れたニーナは，自分の過去を「情熱の幕合狂言」(619) として回顧するのであり，マーズデン (Marsden) も「人生との戦いという長い幕合狂言」(669) とか「試煉」と（平安への）「準備」の「幕合狂言」(681) といって過去をふり返るのである。ニーナのはげしい幸福の追求はこの空しい幕合狂言の中のことである。そしてこの作品はまた「全世界は舞台である」(*As You Like It* II. vii) と観じる思想系列の中でのオニールの位置をよく示すことにもなるのである。

II

許婚者ゴードン (Gordon) との結婚を父に阻まれたまま，そのゴードンを死なせてしまったニーナは，はげしく父に反抗して，家を出る。ニーナは今「ある恐ろしい謎」(495) に直面している。ゴードンの死後，本当の自分がわからなくなってしまった彼女は，これからその自分を完全にとり戻してみせる (500) という。見失われていた自分をとり戻すために家を出るニーナ，ここにわれわれはもうひとりのノラ，(Nora)，もうひとりの「新しい女」をみる。但しこのニーナは，父やマーズデンから見れば，現実と非現実の混乱したままの心理状態にあり，「病んで」(494) おり，ゴードンとの結婚を果せず，子供の生めなかったことを嘆き，「永遠に幸福を失った」(501) と叫ぶ姿は，「ひどく情欲的」で「獣」(502) とさえも見える。しかしニーナは主張している，「あたしは病気ではありません」(500) と。

ゴードンを知る前の，ニーナの娘時代は，ダレル (Darrell) によっては「幸福に一身を保護され，健康で，心の安らぎ (peace of mind) を得ていた時代」(518) といわれている。この心の安らぎと結びついた幸福は，たしかにめでたいあり方ではあろうが，これはニーナが自覚し，執着して克ちとったものではなかった。しかしニーナには，ゴードンと結婚し，ゴードンの子を生むことこそ，新しい幸福となるはずであった。彼女はそれが得られなかった。この幸福の喪失感から，ニーナの幸福への覚醒がはじまる。これから彼女は幸福を求めて叫び続ける。しかも執拗にである。そこにはもはや「心の安らぎ」はない。何かにとりつかれているかの如くである。そのはげしさはダイモニックである。

ニーナのこの態度に関し，筆者は Eudaimonism という語を思いうかべる。但しそれは決して，例えばアリストテレスの幸福説がここにあてはまるというのではない。ただこの語自体の一般的な意味解釈が，ニーナのあり様を説明してくれる，と思えるのである。ニーナには，彼女に幸福を追求させる霊が宿っていたのではないか。そのように描くことがオニールの意図だったのではないか。Eudaimon とは，ギリシャ語で「よき霊」であり，人にそなわっているこ

5. これと似た言葉は，オニールの他の作品の中にも何回か出てくる。一例だけをあげておく。「人生とは，二つの覚醒の時にはさまれた悪夢である，とわきまえておくにかぎる。毎日は人生の縮図なのだ。」(*Marco Millions* 266)

の霊の指令に合致することが幸福である，とされる。ここでの daimon はまた，ラテン語においては genii となるが，これは「生む」ものなのである（*Lat.* genere 参照)。幸福を追求するニーナが，またはげしく自分の子供を求めることも，ニーナの Eudaimonism の重要な一部であると考えられる。またダイモンは派生的な意味においてであるが，しばしば悪魔と同一視され，破壊的に機能するものと考えられている。この派生的な意味をも含めてダイモニクであるのがニーナではないか。

3 幕で，夫サム（Sam Evans）の母親の家を訪れたニーナは，この家が「魂を失ない」，この家には「何のお化けも住んでいない」(534) ことに驚いている。しかし彼女自身，自分に住む「お化け」——ダイモン——を自覚してはいない。あるいはニーナのゴードンに対する「愚かな固定観念」(520) が，ニーナのダイモンを象徴しているのかも知れない。ともあれ，彼女はダイモンにつき動かされているかの如く，「幸福」をしつこく叫び続け，またその言葉にひきずられて，わが身を処していくのである。「平和の内に朽ちていく」(619) までは。しかもニーナは自分の求める幸福が，一体何であるのか，を考えはしない。彼女はただ飢え，常に満たされない願望にとらわれるのみである。この作品の中で，幸福とは何か，を反省するのは，ダレルだけである。(566) 彼は考える。医師である自分は「肉体の不幸」を救うための研究はした。「瀕死の病人の唇に幸福な笑み」がうかぶのを見たこともある。性の遊びの快楽を経験したこともある。面目をほどこして自己満足にひたったことさえ，すこしはある。しかし，本当の幸福とは何なのか，彼にはわからない。とも角ニーナのしつこい幸福談義は，自分には縁のないことと思われる (568)。彼もここまでしか考えない。このダレルはしかし，ニーナとかかわることで，現実に「幸福」感を味わいもし，不幸にも身を誤まることにもなる。

さてこれから家を出るニーナは「ゴードンに対する卑怯な裏切りへの償いをしなければならない」，そうすることが自分の「義務」(500) であるという。自分はこれから，他人の幸福のために，自らを「与える」という。「他人を喜ばせること以外に，自分の喜び」を持つこともなしに，である。しかし，かく宣言するニーナはまた，自分で子供をつくり，それを自分のものにする (501, 503) ことへの願望をもはげしく持つ。与える，といいつつ，自分のものにすることをも願う。これは矛盾ではないか。いずれかがうそなのではないか。ニーナは今「言葉という音のうしろにかくれて」(521) 偽装しているのではないか。

ここでオニール自身の人生観，また作品の構成を考える上でも，ひとつの重要な核をなすと思われるオニール自身の言葉を想起しておきたい。

> 「人の外的な生は，他人の仮面にとりつかれ，孤独の内にうつろいいく。だが人の内的な生は，自分自身の仮面によって迫害され，孤独の内にうつろいいく」。[6]

今の，また今後のニーナを見る上で，オニールの述べたこのドグマは，多くのことを説明してくれるようである。義務感からする代償行為，これは明らかに，オニールのいう「外的な生」のとる行為であり，それはニーナの「内的な生」にかぶせた仮面なのではないか。この代償についていえば，ニーナとサムとの結婚も，ダレルとの情事も，ニーナにおいては，亡きゴードンとの果されなかった結婚の代償である。またニーナは，サムを幸福にする「義務」としてダレルの子を生むのであり，また同じ「義務」として，ダレルを拒否して，サムの家にとどまるのである。そして彼女の「内的な生」の方は，自分の子供を自分のものとすることを常にはげしく求めるのである。またニーナの父親が，娘の結婚を阻むときに用いた「名誉」(honor)「掟」(code) (501) も，「義務」と同じく，「外

6. "Memoranda on Masks", *The American Spectator* Nov. 1932, Reprinted in Oscar Cargill *et al* eds., *Eugene O'Neill and His Plays* (New York: New York University Press, 1961), p. 117.

的な生」にかかわるものであることも付記しておく。

III

ダレルが「献身に対する病的な憧れ」(519)と呼ぶ，彼女の戦傷者相手の行為は，結局はニーナには何の心のいやしにもならなかった。このニーナに科学者ダレルはサムとの結婚をすすめる。彼はニーナに「幸福な生活」(517)を送らせてやりたい。「彼女の，犠牲になりたいという願望」に「正常」(normal) なはけ口を見つけてやらねばならない (519) とダレルは考える。ニーナはこのダレルの提案に応じる。彼女が次につかまえようとす幸福は，このサムとの結婚に結びついてくる。ニーナはいう。サムの「表面的な生活に自分の調子を合せるのも，よい生き方かも知れない」と。(528) 皮肉なことである。ニーナのこの「表面的な生活」という言葉は，マーズデンの言葉「サムのかくれた能力を表に出してやる (to the surface)」にからめてひきずりだされたものである。事実「うわべだけ」の妻となるニーナは，サムを成功者として「表に出してやる」ことになる。何の「深さも持たない表面的な生活」であっても，忙しくしていれば気をまぎらせることはできよう，とニーナは考える。しかしそこには愛はない。ダレルのいう「正常な」とか，ニーナのいう「表面」が，「外的な生」にかかわるものでしかないことはいうまでもない。しかしニーナがこのことに妥協するのも，これが彼女の「内的な生」の持つ，子供がほしい，という願望を叶えてくれる可能性があるからである (528)。

3幕のはじめに登場するニーナはもうサムの子を宿している。それ故に彼女は今幸福である (532)。今ではサムを，すこしは愛してさえいる。自分の子供はサムの子供でもあるのだから。彼女の「外的な生」は「内的な生」の要求をも満たしてくれる。しかし彼女の内と外の生は，未だ調和を得ていない。何故ならばニーナが思いうかべるわが子の顔は，依然亡きゴードンのそれ (533) なのであるから。それで上述のようなニーナの思いこみにもかかわらず，マーズデンは問う，本当に「ニーナは幸福なのだろうか」(534) と。彼の観察では，ニーナはサムに対しては，愛情にみちた妻であるかの如きふりをして (playing the part) いたにすぎない。

ニーナはやがてサムの母親と相対することになるが，ここでも彼女は幸福の獲得を阻まれる。

> エヴァンズ夫人「……あなたたち二人だけで，これからも，幸福に暮していったらいいじゃないの。」
>
> ニーナ (心の内でおびえて)「この言葉のうしろに何があるのか知ら。又もやあの死の感じがするわ。」(539)

ニーナはサムの母親から，不幸なサムの出生の秘密を教えられる。ニーナは最初の結婚を阻まれて不幸になった女であったが，サムの母親は結婚したが故に不幸になった女であった。

サムの母親の打ちあけの中で，ひとりの「幸福な」女性のことが語られる。狂女ベッシー小母さんである。

> 「あの人は坐ったままで，一言もいわない。けれど幸福なのよ。ひとりで笑ってばかりいるわ。この世のことに何の心労もないの」(541)

この人も，正気であったときには，常に不幸であったが，今やこの人には，内的にも，外的にも，自己の生というものが——欲求が，ないのである。それでこの狂女の心は平安である。

さて今までニーナは，サムは，自分と異なり，正常 (normal)——健康で正気 (sane)——な男である，と思いこんでいた。それで自分はサムとの間に幸福な子供をもうけて，「子供のことでわれを忘れ，サムを愛することもできよう」(542) と思っていたのに，今そのわが子がおそろしい宿命を背負っている，と聞いて，ニーナは「あたしはあの人を憎みます」(543) とまで叫ぶ。しかし彼女自身も認める如く，彼女は，サムが自分を必要としていたので結婚しただけのこと，自分が必要としたのはただ子供だけであった。その子の出生を，今彼女は阻まねばならない。愛情もないのに，サムとは結婚す

べきではなかったのである。自分は自分を救うためにだけ，サムを利用したにすぎない。彼女は今，自分があのゴードンに対してと同じように，サムに対しても卑怯なまねをしてしまったことを反省する。(544)

サムの母親は，自分は不幸な人々に立派につくしてあげた（lived fair）ともニーナに語る。この言葉がニーナに，play the game という言葉，そしてゴードンの守った「名誉」という言葉を想起させる。play the game[7] とは「正々堂々と行動する」ことでもあり，また「表面的にルールに従っているようにみせかける」ことでもある。ニーナはこの二つの意味で play the game を想起したにちがいない。彼女はサムと生活し続けることを母親に誓う。世の常の「正常な」外見の生活を持ち続けようとするのである。しかし夫が健全でないときに，どうして健全な子供を持つことができるのか。それは健全な別の男と通じることによってしか果されない。ニーナにおいては，姦通のみが彼女の「正常な」生活を可能にしてくれるのである。この場のはじめに自分の手紙を読んでいたニーナも，やはりこの「正常」(531) という言葉を使っていたことを想起しておこう。

サムの母親はニーナにこう教える。

「幸福でいること，それが何がよいかわかるのに一番近づくことです。幸福でいること，それがよいことなのです。他のことをいってみたって，ただ口先きだけのことです。」(546)

固い訳語であるが，その真意はこうであろう。

「本当にどうすればよいのか，あたしにはわかりません。しかしせめて表面的にだけでも幸福の擬態を持ち続けること，それでよしとせねばなりません。」

功利主義ときめつけるには，あまりに切ない心境である。サムは「幸福」であらねばならぬ。サムを「幸福」にするためには，ニーナは何をしてもよい。健康な子供を持てば二人ともに「幸福」でいられる。そんな生き方をすることが，ニーナの「本当の義務」なのである。忌わしい事実をひたかくして，乃至は（サムにおいては）その事実を知らないままに[8]「正常な」生活を持つことが「幸福」なのだ。ニーナは「幸福になりたい」(546) と思う。母親もニーナに「幸福になっておくれ」(547) という。このときのニーナの心の中では，実は二つの「幸福」が併存している。一つは母親のいう「幸福」であり，もう一つは，ニーナの「内的な生」の欲している「幸福」である。

IV

4 幕のニーナはすでに堕胎をすませてしまっている。彼女は変ってしまった。父親になる資格がないとわかったサムに対して，ニーナは今，嫌悪と軽蔑の情を抑えがたい。しかしまたこの夫が哀れでもある。それでまた「あなたには幸福になってほしいわ」(553) とやさしく語りかけもする。依然亡きゴードンのことが頭からはなれないが，そのゴードンの名と結びつけて彼女は，ゴードンの守った「名誉」を想起する。そして世のしきたりに従って，妻らしくふるまう（play the game）ことで，しばしであっても，再びサムを幸福にすることができよう，と思う。(553) 健康な子を生むことが自分の「義務」であると教えたサムの母親の言葉も想いだされる。自分は前には，戦傷者たちに束の間の幸福をあたえるために，しゃにむに（without a thought）自分の身を任ねた。あれをくりかえしてはいけないかしら——サムの「幸福」がかかっているのだから，と。そして「あたし自身の幸福も」(554) とつけ加える。

7. また 553 も参照。しかし後にゴードンが，母親ニーナは，父のために自分の幸福を放棄した，といって "that was playing the game" (671) というとき，彼は素朴に母親が立派にふるまった。と賞讃しているのである。またゴードンが父親サムを回顧して "He was game" (668) というとき，彼の意識においては「父は立派であった」となるが，この game はまた「えじき，かも」でもあり得ることを想起しておきたい。

8. マーズデンの「自分の影にびくびくしないこと，それこそ天上的な最高の幸福であるにちがいない」(602) 参照。

やがて彼女の前にダレルが現れる。今までの事情をうちあけるニーナに，ダレルは，一度は，サムとの離婚をすすめる。(565) しかしニーナは，自分はサムの母親に，サムを幸福にすると約束した。サムは自分との間に子供ができないと思っているので，不幸なのだ。自分も子供を失ったので不幸である。それで，二人が幸福になるためには，どうしても次の子をもうけなければならない，と訴えかける。ニーナの訴えをきいたダレルはいぶかる。

「あの目付き……一体俺にどう思ってもらいたいのだ……何故この女は幸福ということをこんなに口にするのだ……俺は幸福か……わからない……幸福って何なのだ。」(566)

しかしこのダレルが，これから，この幸福という言葉にこだわり，この語を用いつつ，ニーナとの情事にひきずりこまれていく。「俺はニーナを幸福にする義務があるのだ」(566)，「臆病者は幸福になれないのだ」(568) ニーナを救うことができるのなら「第三者〈たる俺〉もすこしは幸福を味わってもよいか」(568) そして「俺は幸福に情欲を持つ」(570) と。

二人の情欲はつのっていく。しかし二人は共に，自分がニーナであり，ダレルであることを否定して，一は科学者，医師としての役割りにおいて，他はサムの妻としての役割りにおいて，二人で子供をつくろうとする。ダレルはサム一家の不幸の治療に用いられるモルモットになろうとする。それが健全な義務なのだ。ニーナの頭には，サムの母親のあの言葉「幸福でいること，それが何がよいかわかるのに一番近づくことです」がこびりついている。しかし，愛を持つことをさけながら，二人のみせるこの奇妙なラヴ・シーンの終りでは，ダレルは医師の仮面をぬいで，自分を自分と呼ばざるを得ない，ニーナも自分がニーナであると認めざるを得ない。ダレルは「あなたたちの幸福のために」(571) ニーナの意に従う。(心の内で「俺はしばらくは幸福になれるぞ。」) そしてニーナは叫ぶ，「あたしは幸福になれる……夫を幸福にすることができるわ。」(571)

5幕のニーナはまた妊娠している。彼女は満ちたりた気持ちで夢見心地である。「様々の疑問もこの安らぎのしじまの中に消えてしまう」(573) は彼女の内なる生の声である。科学の名においてしたことであったが，ニーナがダレルと過した時は「すばらしい幸福の午後」(573) であった。しかし彼女の胎内の子の親はサムではない。

ダレルもニーナの自分に対する愛を知って幸福感を味わっている。彼女と過した午後は，彼にも，幸福の時であった。この喜びのためには，サムなどどうともなれ，とさえ思う。二人は愛を確認する。そしてニーナは「あー，ネッド，あなたのおかげで，あたしはとても幸福だわ」(579) と叫ぶ。こうして彼女が，サムとのうわべだけの生をうち切り，ダレルをわがものとしかける丁度そのとき――このニーナの「幸福の最中」にマーズデンの邪魔がはいる。(580)

しかしマーデンのこの邪魔は，ダレルにはむしろ救いであった。ニーナに愛を告白したものの，彼はニーナとの情欲――愛におぼれ，彼女に自分の生命をにぎられてしまうことから，逃げだしたい気持ちでもあった。マーズデンの来訪によって，ダレルは「俺はまた健全になれた」と喜ぶ。

ニーナの方も，サムの母親の，息子を幸福にしてやっておくれ，という願いを想いだして，心うろたえる。しかし敢えて，自分自身の幸福の実現をはかろうとする。(583) そして尻ごむダレルに「子供には父親が要るのです」「ただあなたの愛だけがあたしを幸福にしてくれるのです……」と迫る。ダレルは結婚する気持ちのないことを告げ，サムの母親の願いをニーナに想起させる。が彼女は尚もひるまず，いう。

「……あたし，サムのお母さんの言葉をおぼえているわ。こうでしたね。『幸福でいること，それが，何がよいかわかるのに一番近づくことです』って。だからあたしもこれから幸福になるのです……今度はあたし自身の幸福のことを考えようと思って

います。——そして，それはつまりあなたのことと——そしてあたしたちの子供のことです……」(585-6)

ダレルは又もやニーナの魅力に屈する。しかしまた丁度そのとき，今度はサムによって，二人だけの対話は中断されてしまう。そしてニーナがしばらく座を外している間に，ようやくダレルの決心は固まる。自分はサムには立派な人間だと思われている。このサムの生活を破壊することはできぬ。自分の一生も台なしにすることもできぬ。ニーナが愛しているのは，依然ゴードンなのだ。自分は彼女の肉体というわなにはまったのだ。彼女の前では，自分は意志の力を失ってしまう。ヨーロッパへ逃げていこう。赤ん坊のことをサムにいってやれば，ニーナも自分をあきらめるであろう。(「可愛そうに，ニーナは心から俺を愛してくれているのに」。) 彼女には子供ができる，そして幸福になるだろう。サムもまた幸福になるだろう。(587-588)

サムに，サムが父親になることを告げて，ダレルは去る。ややあってこの場に戻ってきたニーナは，自分が，ゴードン同様に，ダレルをも失ってしまったことを知る。子供のできることを知って大喜び，そして仕事に自信もできたと語るサムに，ニーナは力なく，

「あなたを幸福にするよう努めるわ」と語る。しかしこのときも，彼女の内なる心の声はこう語っている。

「ネッドの子供じゃない……サムの子供じゃない……あたしの子供なんだ。」(591)

V

6幕のニーナにはかなりの変化が起っている。老けが目だつ。これまでの悩みの跡が顔にきざまれているが，また現状への満足と落ちつきの表情も見られる。彼女の家も気持ちのよい家庭的雰囲気をただよわせている。子供はゴードンと名づけられている。亡きゴードンにちなんでつけられたのである。

「サミと結婚できてよかった……あの人はあたしのもの……嫉妬もない……恐れもない……苦痛もない……あたしは平和を見出した」(597)

ヨーロッパに去ったダレルであったが，依然ニーナを思いきることができず，彼女を求めて戻ってくる。(「今度は俺が幸福になる番だ」(605)) ニーナも依然彼を愛している。そしてダレルを自分のものとして，二度と手ばなすまい，と思う。サムほどによい夫はない，ダレルほどによい恋人はない。「あたしが幸福であるためには，二人ともが必要なのだ」。(609)

二人きりとなって，彼らは再びたがいの愛を確認する。しかし，自分といっしょに家を出てくれ，というダレルを，今度はニーナが拒否する。サムと子供のことを思えば，それはできない，といって。

「あたしも変りましたわ，ネッド……あたしはもう曽つてののぼせあがっていたニーナではないの。今でもあなたを愛しているわ。これからもずっとそうよ，けれど今じゃあたし，あたしの赤ちゃんも愛しているの。この子の幸福を守ってやることが一番大切なことなの」(612)

しかしまたニーナは彼をひきとめておきたい。そして「あたしはサムなんか愛してはいません。あなたを愛しています」(612) とまでいう。自分はサムの所にとどまるが，「あなたにはあたしの愛をあげる」とも。つまりダレルは自分の恋人のままであれというのである。

「こうすることが，みんなが幸福になるのに一番近づけるんじゃないの。」(612)

これはニーナの頭にこびりついている，あのサムの母親の言葉のもじりである。ニーナはサムたちには知られずに，ダレルを恋人として持ち続けたいのであり，ゴードンの出生の秘密は，サムの幸福のためにも，かくしたままにしておこうというのである。それで当事者みんなが一番幸福に近いところにいることができるのだ。

ダレルはニーナのこの「非人情的，打算ずく」(613) の考えをなじる。しかしダレルがニーナと行なったことも，同様に「科学的」なやり方ではなかったか，とニーナに反論される。

またダレルは，サムに事実一切を告げる，というが，ニーナにはダレルがそれをようしないことを見ぬいている。

こんなことのあとで，ニーナを中心にして，マーズデン，サム，ダレルの三人が集まる。

「Make yourselves at home，あなたがたはあたしの三人の男性なのです。ここはあなたがたがあたしと住んでいる家なのです。しっ，赤ちゃんが泣いたようだわ……」(614)

この後に本稿の冒頭に引用した箇所がくる。奇妙な家庭だんらんの図である。事実は崩壊している家庭の奇妙なだんらんの図である。しかもニーナはこれを完璧である，という。夫，愛人，父，それに子供まで，今彼女は持っている。彼女の内，外の生の欲求はここに全部実現している。ただし，彼女の内的な生と外的な生とは分裂したままである。「地上で一番得意な女」「この世で一番幸福な女」で「あるはず」(should)とは，実はこの分裂したままの二つの自己を持つニーナの悲鳴ではないか。

この完璧な幸福の時は，当然，やがて別の時，幸福の崩壊，あきらめの時に移行する。

VI

およそ11年後，今35歳のニーナ（7幕）は，もうすでに「幸福を求めての戦いがいや」(619)になっている。彼女は「平和の内に朽ちて」いきたいのである。ゴードンはもう赤ん坊ではない。彼女の思いの中では女は40歳になれば，その生はもう終る。そのとき人生は「ただそばを通りすぎ」ていくばかりである。幸福は彼女にとって今や追想されるだけのものとなっている。はげしかった恋も，今は「情熱の幕合狂言」として回顧される。今無気力の毎日を過すダレルに対しては「どんな女だって，人生に目的を持たない男を幸福にすることはできない」(620)と思う。しかしこのニーナ自身，今何を目的としているのであろうか。

息子ゴードンはダレルに反抗するのみか，ニーナからもはなれて，愛情を「父親」サムの方に向けている様子。(624) ニーナはゴードンに無視されている気がする。(624) 以後ニーナはこの自分の幸福のシムボル（「あの子を愛しているのがあたしの幸福だった」(617)）が自分からはなれていく悲哀を味わうのである。

ニーナ自身の心も，ダレルからはなれて，マーズデンの方に傾いていく。(629) 正にマーズデンこそ「老年になってからのうってつけの恋人……情欲を失ってしまった後には申し分のない恋人」(630) なのである。

時はまた移って，ニーナは45歳となる。（8幕）息子ゴードンはマデリンという恋人を得て，近く結婚しようとしている。しかしニーナは息子をうばわれたくない。彼女は二人の結婚を阻止しようとする。そしてそのために，サムにゴードンの出生の秘密をさえあばこうとする。またそのために，ダレルを味方にひきいれようとする。しかし二人はもうすでに恋人同志ではない。

「あたしたち，おたがい，すこしも愛しあってはいない……幸福に過した数日の午後は，後に続く苦痛という罰をうけた……愛，情熱，法悦……そんなものは遠い遠い生の中にしか生きていなかった……生き生きした生は，ただ過去と未来にあるだけ……現在はひとつの幕合狂言……あたしたちが生きていることを証明させるために，あたしたちが過去と未来に呼びかける奇妙な幕合狂言なのだ」。(646)

これが今のニーナの心境である。

しかしニーナはダレルを味方にひき入れるために，もう一度ダレルに自分を受させようと努める。二人で過した「昔しの幸福の日々」を想い起させて。そして彼女は「あなたこそ，あたしの一生に一度の幸福を味わせてくれた」(654)とまでいうが，今のダレルはもうその言葉にはのってこない。ニーナはうそをついている。ニーナにとって本当に大切なのは，亡きゴードンであり，次いで息子のゴードンではないか。彼はニーナに，自分はもう人間の生活に介入する気はなくなった，といい，ニーナにもゴードン

のことに口出しするな，という。ニーナはダレルを失ってしまったことを悟る。

しかしニーナは，尚も，ゴードンを手元にとどめておく計画をすてない。自分自身でマデリンに話して，結婚を思いとどまらせようとするのである。これはかつて父がニーナとゴードンに対してしたことであった。しかし今のニーナは，サムの母親が自分とサムに対してとった態度をまねようとする。（事実彼女は今エヴァンズ夫人と呼ばれてもいる）。息子たちの将来の幸福を願って，という口実をもうけて，二人の結婚を阻もうとするのである。しかしニーナがマデリンに婚約の破棄を迫って，その理由をいいかけたとき，ダレルがそれを阻んでしまう。[9]

この幕の終りで，サムは仆れる。そしてやがて死ぬ。皮肉なことに，本篇の中で，このサムが一番「幸福」な生涯を持ったことになる。発狂のおそれありとされながら，彼だけが，正常であった。不幸な出生の過去を持ちながら，それを全たく知らないままに，他人の子をわが子と思いこみ，またその子に慕われて，彼は死んだ。ニーナというよき妻[10]を得，ダレル，マーズデンというよき友を持って，彼は成功者としてその一生をとじる。彼は「すっかり自分に満足していた」(672) のである。この彼は「死んでまで他人を苦しませる」(674) のであるが。

このサムの死の予感——期待でもある——は，この8幕の中で，ダレルによっても，ニーナによっても語られるが，その中でニーナはこうもいっている。「あたしたちは，いつも自分や他人の死を望んでいるのですね——なのにあたしたちはいつも，うわべだけは他人のものを欲しがる風をして，毎日を送っているのですね」。(651)「欲しがる」ことは，ここでは「うわべ」だけのこととされる。「幸福を求めての戦いがいや」になって「平和のうちに朽ち」はてたいという願望が，こんな言葉をはかせるのであろう。

ニーナの顔には「あきらめ」(671) の色がはっきり現れてくる。（9幕）息子の結婚にはげしく反抗した彼女であったが，サムが仆れて以来，その態度も「無関心」(667) に変っていった，とゴードンは語っている。夫を世話する彼女には，サムの妻というよりは，ただの友人にしかすぎないような，ただ「義務」を果しているだけのような，よそよそしさが見えた，ともゴードンは語る。

ニーナはすでにサムを失った。今ゴードンも自分からはなれていく。彼はニーナにとっても「他人」(stranger) になろうとしている。そして彼女はダレルとも別れる。

> 「あたし，あなたを愛していたらいいのですが，ネッド。ずっと昔しのあのすばらしい午後！　あの午後を過したニーナはずっとあたしの中に生きていることでしょう。そのニーナが自分の恋人を愛し続けることでしょう」。(678)

今ニーナの傍らにはマーズデンだけが残る。今まで「ゴードン家の奴らに幸運をすっかりとられていた」彼は，今やその幸運をひとりじめにするのである。ただしその幸運は，すでに欲情を超えてしまっている。(669)

上空を飛行機でとび去っていくゴードンに向ってニーナは呼ぶ。

> 「天までとんでおいで，ゴードン，お前の恋人といっしょに天までとんでおいで，とび続けるんだよ。あたしの昔しのゴードンみたいに墜落なんかしないでね。お前は幸福でなくちゃいけないんだよ」。(680)

そしてマーズデンに抱かれたニーナが，奇妙な笑みをうかべて，次のように述懐する辺りでこの長篇戯曲は終る。

> 「奇妙な幕合狂言！　そうだわ，あたしたちの生涯は，父なる神の電気仕かけの芝居の中の奇妙な，暗い幕合狂言にしかすぎない！　……あなたがほんとの安らぎですわ，チャーリー。あたしまた娘に戻ってあなたがあたしのお父さんと，あの頃のチャ

9.「この女は俺の一生を台なしにしたように，俺の息子の一生も台なしにしようと思っているのだ。」(659) ダレルもわが子の幸福を願っている。(660)

10. エヴァンズ「男がしゃんと生きていくためには，女のちょっとした激励が必要なんだよ。」(637)

ーリーとがひとつになったもののように思われますわ。昔しの庭[11]はあのままかしら。春と夏の酣けていく午後に（aging afternoons）いっしょに花を摘みましょう。家に帰れば心がなごむでしようね……」（681）

この終幕にも「幸福」なる語は頻出する。息子のゴードンは，父を失った悲しみにもかかわらず，自分の結婚に幸福感を味わい，（671）また今別れようとする母の幸福を願う。（676）ニーナは娘時代の幸福に戻る，といい（673），息子に未来の幸福を願いつつも（680），その息子も結局自分に幸福をあたえてくれなかったことを嘆く。（681）ダレルは「幸福を求める叫び」を知らない「単細胞の生」に戻るといって（680）姿を消す。そしてマーズデンは，最後にニーナを自分のものにできた幸福感を味わう（679，682）。

しかしこの場では「平和」（peace）なる語が幸福に劣らず多用されていることに気がつく。これは明らかに幸福と対立するものとして用いられている。古来数ある幸福説の中には，この平和，心の安らぎ，静かな心，を持つことの中に幸福を見出すとする見解がいくつかある。それは時を超えた，神，永遠への思いを基盤にすることもあれば，時のわくの中での自制，自己超克の思想となって現れることもあった。しかしこの「幕合狂言」は，そうした思想の系列からはみ出したものである。「平和」なる語は，この終幕だけではなしに，第1幕からすでに何度か用いられてきた。それはゴードンを知る以前のニーナの娘時代のあり様が語られるとき，幸福と結びついていたことはすでにみた。その他子供を胎に宿しているときのニーナの落ちついた心(534，537)，ニーナを知らなければ，あるいは持ったであろうダレルの心境（578），サムとの結婚に安住したニーナの心（597，606）などを語るときにも，この「平和」は使われている。しかしこの作品の中では，この語は，生の退潮――あきらめ――老――死，と一番強く結びつく。そのめぼしい例をみておく。

ニーナに去られ，ひとりとり残され，やがてこの世を去るリーズ教授の心境を述べるとき。（504）

ニーナが「死は母なる神に再び結びつくこと……母なる神の持っている平和に戻ること」と語るとき。（524）

サムの母親が「エデンの緑の野には平和がある，ということです，死んでみなければわかりませんが」というとき。（544）

ニーナが「平和のうちに朽ちる」ことをくり返しいうとき。（619，621）

ニーナが「老ける」ことは「平和を意味する」というとき。（646）

仆れたサムに「心の平和」が必要と，ダレルとニーナが交々いうとき。（VIII. 664）

〔これまでのニーナとダレルの会話（644―645）の中に「死への願望」を聞いたわれわれは，この「平和」が内に死を秘めていることに気付く〕。

そして9幕においては，

マーズデンの「ものうげに平和の方にうなだれる」，「老年の平和協定」。（669）

ダレルの「あなたが平和を欲するなら，彼〈マーズデン〉と結婚するがよい」およびそれに応じるニーナの言葉。（678）

マーズデンの「これまでずっとあなたに平和をもたらせることを待っていました」。（679）

ニーナの死の眠りについての言葉。（681）そして「平和の内に朽ちる」（673，679）ことのくりかえし，などである。

マーズデンが，この「平和」の属性を一番よく持つ人物であることは明白である。それは上にみた例の中にも，その他の箇所（556，581，628）にもうかがわれる。この彼においては「平和」と「幸福」は結びつく。彼の「幸福」は欲情をこえたところにあるのだから。

VII

以上「幸福」を軸にして物語りの展開をみて

11. これは以下に引用するエヴァンズ夫人の言葉（544）と対応する。

きたが，焦点はニーナにあり，他の登場人物と「幸福」とのかかわりについては，くわしくふれる余裕はなかった。しかしここにもう二つの引用だけをつけ加えておきたい。

「こと幸福のこととなると，人間誰しも悪者になっちまうんだ。喰うか，喰われるか，だ」。(493)

「ぼくはばくの細胞に戻ろう——海に漂って，幸福を求める，叫び声なんて知らない賢明な単細胞の生命に」。(680)

はじめの引用は，この作品で「幸福」が言及される」最初のものであり，ここでマーズデンは直接にはニーナの父の利己主義を批判する形をとりながら，以後の物語りの中での，作中人物と幸福のかかわりを告げている。そして後の引用は，幸福の追求に疲れたダレルの諦念の告白であり，それがひいては，本篇の終りにおけるニーナのあり様をも示している。

諺も教えている。「余りに自分の幸福について語る者は，嘆きを招く」と。トルストイは，「幸福な家庭はよく似たものであるが，不幸な家庭はみなそれぞれ不幸である」といって，その『アンナ・カレニナ』(Leo Tolstoy, *Anna Karenina*) を書き出しているが，オニールはこの『幕合狂言』の中で，必らずしも似てはいない幸福の諸側面を描く。しかしこれほど頻繁に幸福が言及されるこの物語りも，結局は，さまざまに不幸な生のあり方をうきあがらせることになった。

オニールはこの作品においてショペンハウエルの思想にかなりの親近を示してはいる。しかし幸福を軸にしてみた場合，オニールはショペンハウエルの幸福説を採用してはいない。またオニールがここに用いた「思想傍白」なる技法はこの作品をかなり心理劇的にしてはいる。しかしここに描かれている心理は，「意識の流れ」を忠実に映したものとも思えず，またフロイド乃至ユングの説に忠実に基いているともいえない。こうしたことよりも，筆者は，この作品を書いたオニールにはオニール独自の構想があったと思う。彼は本稿のはじめに引用したドグマの示す思想に基づいて，作品の筋立てのみならず，そこに盛る言葉にも，彼独特の型式化を行っていると思われるのである。

この「幕合狂言」ははげしい生—情熱の場であった。そこでは人物は，他人の犠牲において生きる者（ニーナは une femme fatale でもある）であると同時に，自らが犠牲でもある。また登場人物のひとりひとりは，自分の内的な生と外的な生の相剋を持つ。（サムはこれを欠除する。それで「幸福」である)。こうして生を内と外に区別する——オニールの言葉によれば，仮面をつける——とき，その生を支えている諸価値は相対的限定をうける。作品中に用いられる言葉にも，それが反映する。作品の呈示する生の型式は，それを表現する言葉にも反映せざるを得ないからである。焦点をニーナの「幸福」にあてる中で軽くはふれておいたことであるが，「正常」「正気」対「狂気」，「健康」対「病気」，「神経症」，「成功」対「失敗」，「あたえる」ことと「所有する」ことなどは，相対的に限定された意味において用いられ，内と外でその価値で逆転する。'to play the game' も意味に表裏を持ち，「義務」，「名誉」，「掟」，「科学」，も外的な「表面」を支える価値という限定をうける。「愛」さえも「憎しみ」と相対化され，執着の意味を強くする。オニールはまた，神に言及し，超越者への志向を示しはするが，それはまた父と母，「科学」(523)，「電気」(681) に相対化されてしまう。ニーナはゴードンに終始執着するが，あるいはこれはぼかされた 'God' なのではないか。いずれとしても「ゴードンが死んだとき，男はみんな死んでしまった」(509) というニーナは，その死んだゴードン——幸福のシムボル——を求めてはげしく生きた，のみならず，新しい世代のゴードンを生みさえもした。

勿論オニールはこの言葉の意味の限定——それは弱まり，あいまい化でもある——を通して言葉に表現しきれぬ，何物かを，言葉のうしろに探ろうとしていることは否定できない。またこの作品においても，彼は仮面の採用こそ捨て

はしたものの，代って「思想傍白」の技法を用いて，リアリズムを超えようと意図していることも否定できない。しかしオニール好みの「内的な生」と「外的な生」の相対化の型式の顕著にみられるこの作品は，それ自体が相対的な二つの特質を持っている。ここには生の神秘が示唆されている。しかしオニール自身も認めている[12] 如く，この作品の場合，彼は神秘の内奥に深く入りこむことはできなかった。代ってこの作品は未だ強度にリアリスチクである。そしてこの作品は，はげしいが，はかない女の一生の風刺画の様相を強く呈するのである。

12. “Memoranda” 前掲書 p. 119.